発行者　ユニセフ子どもネット事務局　財団法人 日本ユニセフ協会　広報室　〒108-8607 東京都港区高輪4-6-12 ユニセフハウス
でんわ：03-5789-2016　ファックス：03-5789-2036　電子メール：jcuinfo@unicef.or.jp

TOPICS TOPICS TOPICS TOPICS TOPICS TOPICS TOPICS TOPICS TOPICS TOPICS TOPICS TOPICS TOPICS TOPICS TOPICS TOPICS TOPICS TOPICS TOPICS TOPICS TOPICS

## ユニセフトピックス

日本

### 国連子どもの権利委員会が日本政府の報告を審査

委員会は、日本政府に、より“子どもの権利”にもとづいた活動を勧告

「子どもの権利条約」は、それを締結した国が、国内の子どもたちの問題や子どもの権利を実現するために政府などが何をしたか、それによってどんな前進があったかを、国連の子どもの権利委員会に定期的に報告しなければならないと定めています。これにしたがって、今年1月28日、2回目となる日本政府からの報告の審査が、子どもの権利委員会でおこなわれました。(第1回目は1998年におこなわれました)

日本政府は、子ども買春などの商業的性的搾取を罰するために「児童買春等禁止法」をつくったり、子どもの虐待を防ぐための「児童虐待防止法」をつくったりしたこと、日本が国際援助のために世界でも最大の資金を出しており、その支援の多くを開発途上国の保健や教育のためにあてていることなどを報告しました。

子どもの権利委員会は、こうした点を評価する一方で、次のような点などについて、さらに考え直したり、対策をすすめる必要があると指摘しました。

#### 子どもの権利委員会が勧告した主なことがら

- 日本政府はまだ「子どもの権利条約」の2つの選択議定書（子どもの兵士と子どもの商業的性的搾取に関するもの）を批准していない
- 子どもの権利の分野において、日本政府はNGOなどの市民社会との協力が十分でない
- 子どもや一般の人びとが、まだ「子どもの権利条約」の内容や理念、その生かし方などを十分に理解していない
- 日本では、結婚できる最低年齢が男子18歳、女子16歳と男女で異なっている
- 子どもの意見表明や活動の自由が、ときに制限されている
- 日本では、日本人の父と外国人の母を持つ子どもが、日本人の父親が出産前にその子どもが自分の子どもだと認めていない限り、日本国籍を取ることができない。そのため無国籍になってしまう子どもが生まれている
- 学校や施設、家庭などで、いぜんとして体罰が残っている。子どもの虐待について、それを防ぐための方策がまだ十分ではない。
- 子どもの精神の健康を守るための方策が十分ではない
- 若者の間で、性感染症が増えており、麻薬も広まっている
- 子どもの自殺が多い
- 教育制度が競争的すぎて、精神の健康に悪い影響をあたえていたり、経済的な負担が大きい補習のための教育（塾など）を受けなければならなくなっていたりする
- 1998年の1回目の報告のときに「子どもの権利委員会」から指摘された、差別の禁止、学校が競争的すぎること、いじめをふくむ学校での暴力などの点について、十分なフォローアップができていない
- 日本では、法律で結婚していない人同士の子どもが差別されている。また、女子、障害のある子ども、在日韓国・朝鮮人、アメラジアン（アメリカ人とアジア人の間の子ども）、アイヌや被差別部落出身などの少数派の人びとに対する差別が残っている

今後、子どもの権利委員会から出された勧告を日本がどのように実現していくか、日本政府をはじめ子どもに関わるすべての人の取り組みが求められています。

アフガンスタンと南部スーダン

### 元子ども兵士たちへの支援が急がれる

学校に通うアフガニスタンの子どもたち
©UNICEF Afghanistan/Premfors

アフガニスタンでは、2,000人の元子ども兵士に対して、体や心のケアをおこない、平和な社会生活にもどれるようにするためのプログラムが2月10日からはじまりました。アフガニスタン北西部のバダクシャン州からはじまって、2月中に同じようなプログラムがクンドゥスなど他の4州でもはじめられます。2004年の終わりまでには、合計で5,000人の元子ども兵士が支援を受けて、学校に通ったり、職業技術を学んだりできるようになる予定です。ユニセフは、アフガニスタンには8,000人の元子ども兵士がいると推定しています。すでに多くの子どもたちが軍隊からはなれていますが、教育のチャンスも収入を得る方法もない子どもたちには、通常の社会生活にもどるために一刻も早い支援が必要です。

また、南部スーダンの白ナイル上流地域でも、1月末に、ゲリラ組織SPLAが子どもの兵士を除隊させることを決めました。この地域の子ども兵士800人のうち、最初の94人の子どもたちが軍隊から解放されました。除隊式で、「銃を置いて軍服を着がえ、家族のもとへもどって学校へ通いなさい」と命じられた子どもたちは、行進しながら「学校！学校！」と大きな声をあげました。10歳のジョン・マジャクくんは、「勉強したい！」と話し、何カ月もはなればなれになっていたお母さんと会うことを楽しみにしています。ユニセフは、2000年から南部スーダンでの子ども兵士の解放をはたらきかけ、2001年の終わりからSPLAなどが解放した子ども兵士は12,000人にのぼっています。白ナイル上流地域での子ども兵士の解放が進んでも、まだ2,500人の子どもが兵士として残っており、ユニセフは、すべての子ども兵士の解放を目標に活動をつづけています。

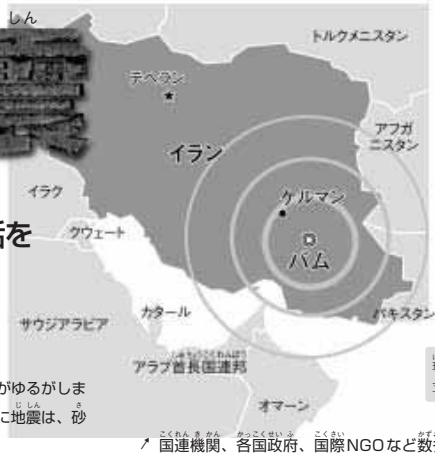
しかし、ここ数カ月、スーダンでは、西部の地域で民兵などによる略奪や焼きうちがひんぱんに起こっており、となりの国のチャドに多くの難民が逃げ出すなど、不安定な状況がつづいています。ユニセフはチャドに逃れたスーダン難民の子どもたちへの支援なども進めています。

2001年にスーダンで解放された元子ども兵士たち
©UNICEF/Airlift-05

もくじ

ユニセフトピックス ……1
イラン地震　4万人の命をうばった12秒間／現地にユニセフの支援物資が届くまで ……2-3
地図で見る世界の子どもたちのようす ～「世界子供白書2004」発表“女の子も学校に行く”～ ……4-5
ユニセフ子どもネットメーリングリスト　ユニセフ・スタッフ 山口さんにインタビュー！ ……6-7
REPORT&INFORMATION〈報告とお知らせ〉……8

# イラン地震



©UNICEF Iran

現地に飛行機で届いたユニセフの支援物資。

## 12秒間が4万人の命を奪い、数えきれないほど多くの子どもたちの生活をこわしていった…

### 明け方におそった大地震

昨年12月26日、現地時間午前5時28分、イラン南東部の町バムを大地震がゆるがしました。砂漠地帯にあるバムの200km四方に大きな町はありません。それなのに地震は、砂漠ではなく、まさに町の中心部をおそいました。

なくなった人はおよそ4万人※。けがをした人はおよそ3万人。1995年に神戸などをおそった阪神淡路大震災で亡くなった人はおよそ5,000人ですから、いかに被害が大きいものであったかがわかります。町の建物の85パーセントが倒壊し、家をうしなった人は、45,000～75,000人と推定されています。イランの人口の半分以上は18歳になる前の子どもたちなので、被害を受けた人の半分以上が子どもたちだったはずです。となりの国、アフガニスタンのユニセフ事務所から、地震直後に現場に到着した緊急支援担当スタッフのエザトゥラ・マジードは、「こうした災害のときには、けがをする人よりなくなる人の方が少ないものです。今回は、地震のたてゆれの力と地震がおこったタイミング、建物の弱さなどによって、こんなにもひどい被害になったと考えられます」と話しました。

（※1月16　付 イラン政府発表）

©UNICEF/HQ04-0003/Shehzad Noorani

地震でくずれた町を歩く7歳のアフィファ（左）と8歳のファティマ。二人は、避難したキャンプではじめて知り合いました。アフィファは、「お父さんはどこかへ行ってしまったわ（地震で　くなった）。お母さんはいるけど、家がどうなったのか知らないの」と話します。花束をもったファティマは、「おばさんのおうちでこの花を見つけたの。テントに持って帰って新しいおうちができるまで大切に育てようと思うわ」と言います。ファティマの家も完全にこわれてしまいましたが、幸い、家族は近くの村のおじさんの家にいて無事でした。

↗ 国連機関、各国政府、国際NGOなど数多くの団体が活動し、現地の人びとの役に立つためには、それぞれが連絡をとりあい、協力しあうことが必要です。支援活動がおこなわれるかたわらで、国連のUNDAC（国際災害評価調整）やUNOCHA（国連人道問題調整局）という機関が中心となって、だれがどのような活動をするか、どのように協力しあうかについて話し合いがおこなわれました。この結果、ユニセフは、水と衛生、教育、子どもの保護の3つの分野で、現地の活動を主導することになりました。そのほか、保健や栄養の活動はWHO（世界保健機関）が、食糧や物資の輸送はWFP（世界食糧計画）が担うことになりました。

©UNICEF/E. Carwardine

6万人の人びとのための衛生施設を緊急につくるにはどうしたらいいか、すべての学校がこわれてしまった中で2万人の子どもたちの教育を再開するには何からはじめたらよいか。現地では専門のスタッフがこれまでの経験と知識をしぼって、計画づくりを急ぎました。最初は、支援にあたるスタッフのテントも十分になく、車の中で何日も寝泊まりするスタッフもいました。

1月3日からは、ユニセフも参加して国連合同の本格的な調査がおこなわれました。これにより、被害のようすがよりはっきりしました。たとえば、町にあった3つの病院、24の保健センター、95の保健所は、そのほとんどすべてが倒壊しており、地元の保健スタッフも半分が亡くなっていました。バムにあった学校も10校のうち9校（およそ全体で130校）は完全に倒壊しており、残った学校もあちこちがこわれていました。学校に通う年齢の子どもは、町に32,443人いましたが、このうち9,000人～1万人が命をうしない、先生も3,400人いたうち1,000人がなくなったと見られています。地震で両親をうしなった子どもは1,800人、どちらかの親をうしなった子どもは5,000人という推計も発表されました。

特に衛生環境を整える事業が急を要するものでした。まず、人びとや子どもたちを病気から守る必要があったからです。ユニセフは、トイレやシャワーの設置を急ぎました。

### ぼうぜんとなる人びと…

町は一瞬のうちにがれきの山にかわってしまいました。家族をすべてうしなった人、家族の無事を確認できた人の中には、親類や知人をたよって町を出る人も多くいました。政府や支援機関は数日のうちに避難用のキャンプを用意しはじめましたが、人びとはできるだけ家の近くにいたいとなかなか集まりませんでした。何をする気力もなくなってしまった人びとは、支援物資を取りに出ることさえむずかしく、支援に集まったNGOや国連機関、イラン政府の人びとが、テントをまわって支援物資を届けなければならないほどでした。

子どもたちが経験した恐怖もとても大きなものでした。16歳のお姉さんを地震でなくした8歳のサマリアちゃんは、何か質問されてもお母さんにしがみつくようにして一言も話しませんでした。1歳の妹のナージちゃんを抱いたお母さんは「ナージを医者につれていったり、支援物資を取りに行きたいのですが、サマリアを置いていけません。地震以来ずっと私にくっついてはなれようとしないのです」と困ったように話しました。

### 支援機関の連携した活動がはじまる

地震の後の最初の活動は不明者を探すことです。がれきの下に生きうめになっている人びとを一刻も早く見つけ出し、救わなければなりません。そして、けがをした人や病気の人を治療する緊急の医療支援も必要です。これに、日本を含む多くの国からも援助隊が到着しました。ユニセフ・イラン事務所や周辺の国からもユニセフのスタッフがすぐに現地に入り、続いて、デンマークの首都コペンハーゲンにあるユニセフの物資センターと、となりのアフガニスタンのユニセフの倉庫から、医薬品や医療用具、毛布、浄水剤、水タンク、簡易発電機、テント、緊急支援用の学校セットや、子どもの冬用の衣類など、最初の支援物資が現地に届けられました。↗

©UNICEF/HQ04-0022/Shehzad Noorani

キャンプの中に立てられたテント学校の中に、いろいろな教材を運び込むようす。ユニセフから送られた教材はこうして各学校に配布されていきました。

### 必要なのは長期にわたる支援 子どもたちの心のケアを！

半月ほどたつと、不明者の捜索や緊急医療の支援に来ていた各国からの援助隊の多くが活動を終えていきました。今度は、町を立て直すための支援に入ります。

建物の被害もさることながら、あまりに多くを失い、大きなショックを受けた人びとや子どもたちの心の傷もすぐにはなおりません。子どもたちは、慣れないテントでの暮らしにつかれ、学校の勉強がおくれてしまうのではないか、ここにいて将来はどうなるのだろうかと、とても心配しています。

避難した人びとのキャンプにあるテントの中で学校の教科書を広げるシマ。シマのおばさん、おじさん、おじいさんは、地震で　くなりました。今、シマは家族8人とこのひとつのテントでくらしています。

©UNICEF/HQ04-0001/SHEHZAD NOORANI

こうした子どもたちを支援するためには、一日も早い学校の再開が必要です。学校は、混乱の日々から日常の感覚をとりもどすことに役立ちます。子どもたちが学校に通うようになれば、家族にもコミュニティにも生活をたてなおそうという前向きな気持ちが生まれます。また、学校に集まってきた子どもたちの心のケアを進めることもできます。

しかし、どこに子どもたちがいるのか、何人の先生が残っているのか、どこに仮設学校を建てたらいいのかなどわからないことだらけでした。

ユニセフは、12月のうちに、緊急用の学校セット「箱の中の学校」（1セットで80人分の教材などをカバーする）を240セット以上届けました。緊急事態にこそ教育が必要だということを知っていたからです。政府の人や現地のNGOと子どもたちの状況を調べながら、町の26カ所に仮設のテント学校がつくられはじめました。同時に、レクリエーション用のキットも届け、避難した人びとのキャンプの中に、NGOと協力して子どもたちのレクリエーション用テントを立

てました。そこで、子どもたちは、遊んだり、笑ったり、大声を出したりして、子どもらしさをとりもどすことができるようになりました。

人びとの努力が実り、1月のなかばには学校が再開されました。400人以上の先生がもどってきて、2月のはじめの時点でおよそ8,000人の子どもたちが学校に通いはじめました。26カ所だったテント学校の数は50カ所を超えています。しかし、先生たちの住むところさえ、まだ、きちんとしていない状態がつづいています。

避難した人びとのキャンプの中につくられた幼稚園用のテントの中で、ユニセフから届いたノートをもらう子どもたち。

©UNICEF/HQ04-0024/ Shehzad Noorani

これ以上、先生のボランティア精神にだけ頼っていては、学校を続けること自体がむずかしくなってしまいます。子どもたちも先生も、安心して学校をつづけられるようにするには、まだまだ問題がたくさんあるのです。

バムの町の再建には時間がかかるでしょう。それと同じように子どもたちの生活をたてなおすにも時間がかかります。これから、長期間にわたる支援が必要とされています。

©UNICEF/E.Carwardine

キャンプに届いたユニセフのレクリエーションキット。

### ユニセフ・イラン地震募金受付中

日本ユニセフ協会も、バム地震で被害を受けた子どもたちを支援するために、昨年12月末から緊急募金の受け付けをはじめました。募金は郵便局から送ることができます。

郵便振込口座：00190-5-31000　（財）日本ユニセフ協会

（通信欄に「イラン地震」と明記、送金手数料は免除あつかいです）

## STORY

## バムの子どもたち、学校へ…

冬のかわいた風が通りぬけます。くだけたがれきから細かいチリがまいあがります。チリの向こうから、風にのって子どもたちの歓声が聞こえてきました。ここのところ、こんなに明るい子どもたちの声が聞かれることはありませんでした。声を聞く人びとの顔がこころなしか明るく見えます。

今日、地震の後、避難してきた人たちのキャンプの中に、テント学校がオープンしました。大きな白いテントの中は、石油ヒーターがあってあたたかく、風やちりも入ってこないので快適です。電気が来ていて、電灯もついています。ひとつのテント教室は30～40人用。バム市の第10地区の小・中学校の子どもたちが通います。子どもの数はおよそ150～200人。もどってこられた先生は10人です。午前8時～10時は女の子、10時～12時は男の子と交替で授業を受けます。お話を聞いたり、絵をかいたり、歌ったり、おどったり。体操の授業もあります。できるだけ地震の前と同じ授業をできるように先生も工夫しています。

みんなと楽しそうにゲームをしていた14歳のモハメド・レザくんは、年のわりに細い体つきをしています。モハメドくんのおじさんやおばさん、いとこたちはみな地震で命をうしないました。「地震のあと、何日かたってから、学校に行ってみたんだ。授業がはじまっていないかなぁと思って。でも、学校の建物は何にもなくなっていた。家族がテントを立てるのを手伝うほかは、することもなくてぶらぶらしてたんだ」

モハメドくんのテント学校の先に、エダラット女子校のテントがあります。その学校のアスマちゃんは4年生。「学校がはじまってとてもよかったです」とアスマちゃんははっきりした声で言いました。「だって、学校では、外の大変なことを忘れていられるでしょう」

アスマちゃんは、友だちと一緒に、先生のお話を聞こうと一生懸命です。新しいおうちがどうなるのか、これからのことはまだ何もわかりません。でも、学校に通いはじめたことで、地震の前の生活をちょっとよりもどすことができました。町の人びとが、がれきの向こうに新しい生活を夢見るのと同じように、アスマちゃんも、何週間か、あるいは何カ月かあとに建つだろう新しい学校を夢見ています。

## 現地にユニセフの支援物資が届くまで！

物資センターを中心とした世界中のネットワーク

デンマークのユニセフの倉庫　©UNICEF/Supply Div.

箱づめ作業がおこなわれる倉庫の中 ©UNICEF Supply Div./2002-561/S. Blanchet

バムで起きた地震で、ユニセフは最初の支援物資を2日のうちに現地に届けました。ルートはふたつでした。ひとつは、デンマークの首都コペンハーゲンの港にあるユニセフの物資センターから。もうひとつは、イランのとなりの国アフガニスタンのユニセフの倉庫からでした。

### ユニセフが最初の支援でバムに届けたもの

- 12万人をカバーすることができる緊急用の保健キット
- 150人の赤ちゃんの出産を支援するのに十分な量の出産用キット
- 14,000枚の毛布（7,600枚の赤ちゃん用毛布を含む）
- 安全な飲み水を確保するための浄水剤625,000錠
- コミュニティ用の大型の水タンク16台（1台は5,000リットル用）
- 簡易発電機3台
- テント、防水用シート、ロープ、その他のシェルター用物資
- “箱の中の学校”（緊急救援用の学校セット）240セット以上（最初の物資を届けたあとの第3便で到着）

たいていの場合、ユニセフが活動するときに必要な物資は、まずその国や地域の中で調達されます。その方が輸送などにかかる費用も安い上に、その国の経済を助けることにもなるからです。

しかし、それがむずかしい場合や、今回の地震のように緊急事態が発生した場合には、コペンハーゲンの物資センターが物資の調達や輸送を担当します。

物資センターには、物資の買い付けをする事務所と、物資を保管しておく倉庫があります。倉庫はサッカー場が3つが入るほど広く、港に入った物資を積んだトレーラーやトラックが集まってきます。品質検査を受けた物資が倉庫に運ばれるかたわらで、ベルトコンベアを使って、各地に送り出される物資の箱づめ作業がおこなわれています。

ユニセフは、これまでの長い経験から、緊急の場合に必要となる物資についてよく研究しています。たとえば、ほとんどの緊急事態に届けられる緊急用の保健キットでは、基本ユニットの中に、医療用の基本的な器材（聴診器、ピンセットなど）や応急手当セット（包帯、ガーゼ、体温計、せっけんなど）、安全な水を得るための道具などに加え、12種類の必須医薬品（炎症を防ぐ薬、殺菌剤、抗生物質、脱水症状を防ぐ経口補水塩など）をセットします。トレーニングを受けていない人でも薬を提供したり、保健活動をおこなったりできるように、くわしいガイドブックもついています。また、1キットは10分割できるようになっていて、小さな医療拠点ができても対応できるようになっています。基本ユニットのほか、医療の専門家（医師、看護師など）が使う補助ユニットも用意します。これには、基本ユニットよりも多くの種類の薬（麻酔剤や痛みをおさえる薬、けいれんをおさえる薬などを含む）や、注射器、注射針、カテーテル、縫合セットなどの医療器具が入っています。これらがそろえば、緊急事態にあっても、たいていの治療ができるのです。

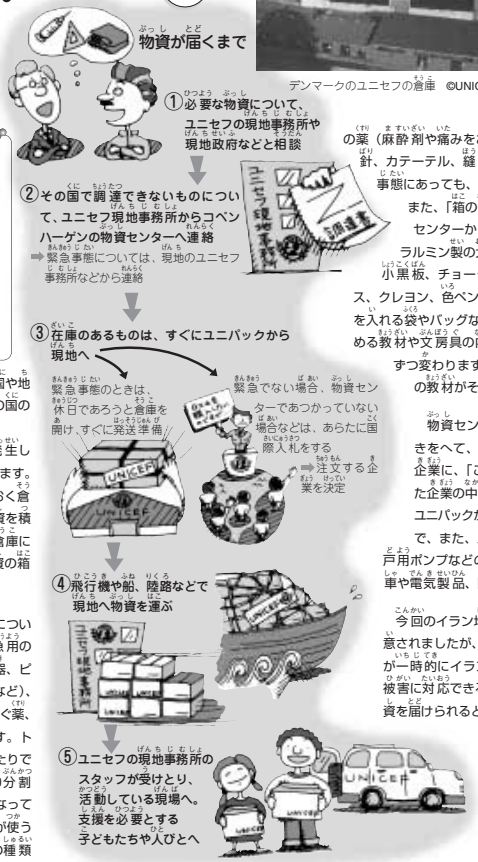
また、「箱の中の学校」とよばれる緊急の学校用セットもコペンハーゲンの物資センターから数多く送り出されています。ジュラルミン製の大きな箱の中に、ノート、えんぴつ、小黒板、チョーク、黒板で使う大きな定規やコンパス、クレヨン、色ペン、けしごむ、はさみ、つみ木、教材を入れる袋やバッグなどがつめられて送り出されます。つめる教材や文房具の内容は、送り先の状況によって少しずつ変わりますが、1箱で80人が勉強できるだけの教材がそろいます。

リベリアの子どもたちのもとに届いた「箱の中の学校」©UNICEF WCAR/Kent Page

物資センターでは、国際入札というてつづきをへて、物資を購入しています。世界中の企業に、「このような品物を求めています」というお知らせを出し、それに応じた企業の中から、品質がよく、もっとも安く提供してくれる企業に注文します。ユニパックがあつかっている品物は、日用品から医薬品などの専門的な物資まで、また、えんぴつやボールペンといった小さなものから、ベッド、自動車、井戸用ポンプなどの大きなものまで1,700種類を超えています。日本の企業には自動車や電気製品、医薬品などが注文されることが多いそうです。

今回のイラン地震では、現地からの情報にもとづいて、コペンハーゲンで物資が用意されましたが、同時に、となりの国であるアフガニスタンの倉庫にあった支援物資が一時的にイランに届けられました。支援活動が続くアフガニスタンでは、緊急の被害に対応できるような物資が保管されており、距離も近いため、より早く現地に物資を届けられると判断したからです。

このように、ユニセフは、どんなときでも、もっとも早く、もっともよい方法で、必要なものが現地に届けられるように、日ごろから準備しています。

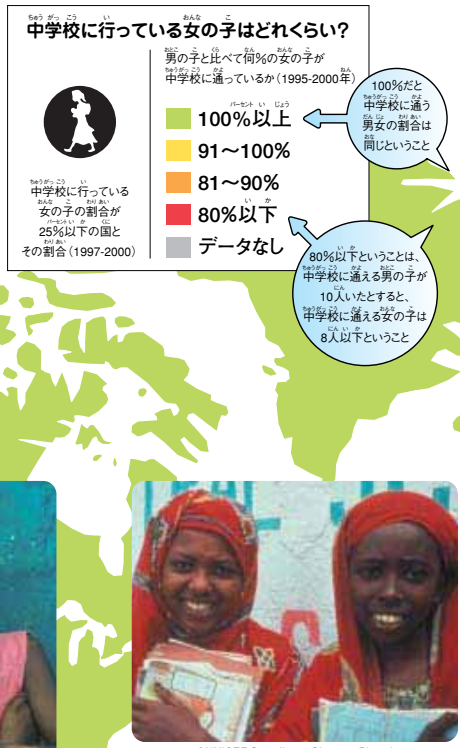


# 地図で見る世界の子どもたちのようす

## 「世界子供白書2004」発表

## “女の子も学校に行く”

## このあたりまえのことを すこしでも早く！



©UNICEF/91-C67-15/Shelley Rotnes



©UNICEF/Somalia-06/Giacomo Pirozzi

## 学校へ通い、生きていく上でたいせつなことを学ぶ

このことは、すべての子どもたちが、あたりまえにもっている“権利”です。

しかし、昨年の12月に発表された『世界子供白書2004』によると、今、世界では、まだ1億2,100万人の子どもたちが学校に通えず、そのうちの半分以上の6,500万人が女の子だといいます。小学校に入ることができても5年生まで通いつづける割合は、男の子より女の子の方がずっと低くなっています。

地図を見てみましょう。中学校に通う男の子と女の子の割合を見ると、その差はもっとはっきりして、世界では、女の子の方が教育を受けるチャンスがずっと少なくなっていることがわかります。

### どうしてなのでしょう

その理由のひとつには、世界の多くの社会に根強くのこっている男女の差別や男女の役割を分ける伝統的な考え方があります。女の子は早く結婚して家の仕事をするものだ、女の子には学校の勉強など役にたたない…などなど。

貧しさも原因です。きょうだいすべてを学校に通わせるお金がなければ、男の子が優先されることが多くなります。多くの女の子が家族の生活のためにお金をかせぎに出ています。

女の子が通いやすい学校がなかったり、学校が遠すぎるという理由もあります。学校に女子トイレがなかったり、学校で女の子が差別を受けたりすることもあります。学校が遠く、通学が危険だと、親は心配して女の子を学校へ行かせません。

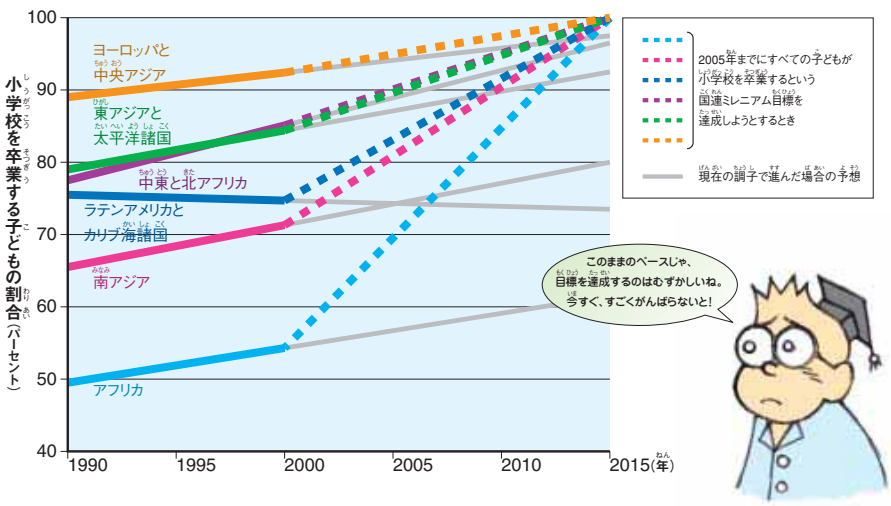
### 解決できる

でも、こうしたことの多くは、世界の人びとが、本気で、すべての子どもたちを学校に通わせようとすれば、解決できるはずです。

女の子が学校に通えるようになり、自分の人生を自分で決めることができるようになれば、大きなよい変化がもたらされることは、すでに証明されています。教育を受けた女性の子どもは健康に育ち、学校にも通います。HIV/エイズなどの病気から身を守り、より生活を豊かにすることができます。国の経済の発展にもつながっているのです。

女の子が学校に通えるようになるということは、男の子も学校に通いやすい環境ができるということです。教育はたんなる“よいこと”ではありません。子どもの“権利”です。だから、どの国も、どの人も、この問題に真剣に取りくまなければならないと白書はうったえています。

## 小学校を卒業する子どもの割合の変化と予想（1990～2015年）




## コラム1 夢は先生！

アワティフは、村に新しい学校ができると聞いた日のこと忘れられません。

「家にだれかがやってきて、この家で学校に行っていない どもはだれ？って聞いたの。おかあさんが、私の名前を言うの 聞いたわ。すごくわくわくしたわ」

エジプトの農村、ベニ・シャラーン村でくらすアワティフ まだ8歳でしたが、毎日、小麦畑で背中が痛くなるまで仕事 手伝い、家に帰るとおかあさんの仕事を手伝う、そのくりか しでした。エジプトでは女の子が学校に通っている割合が低く 家の仕事を手伝っていることが多いのです。村の商人のナイ ムさんが、土地と建物を学校にしようと申し出て学校ができ ことになり、村の女の子も学校に通わせようとなったとき、 父さんや村の男の人たちは「女が何のために勉強するんだ」と

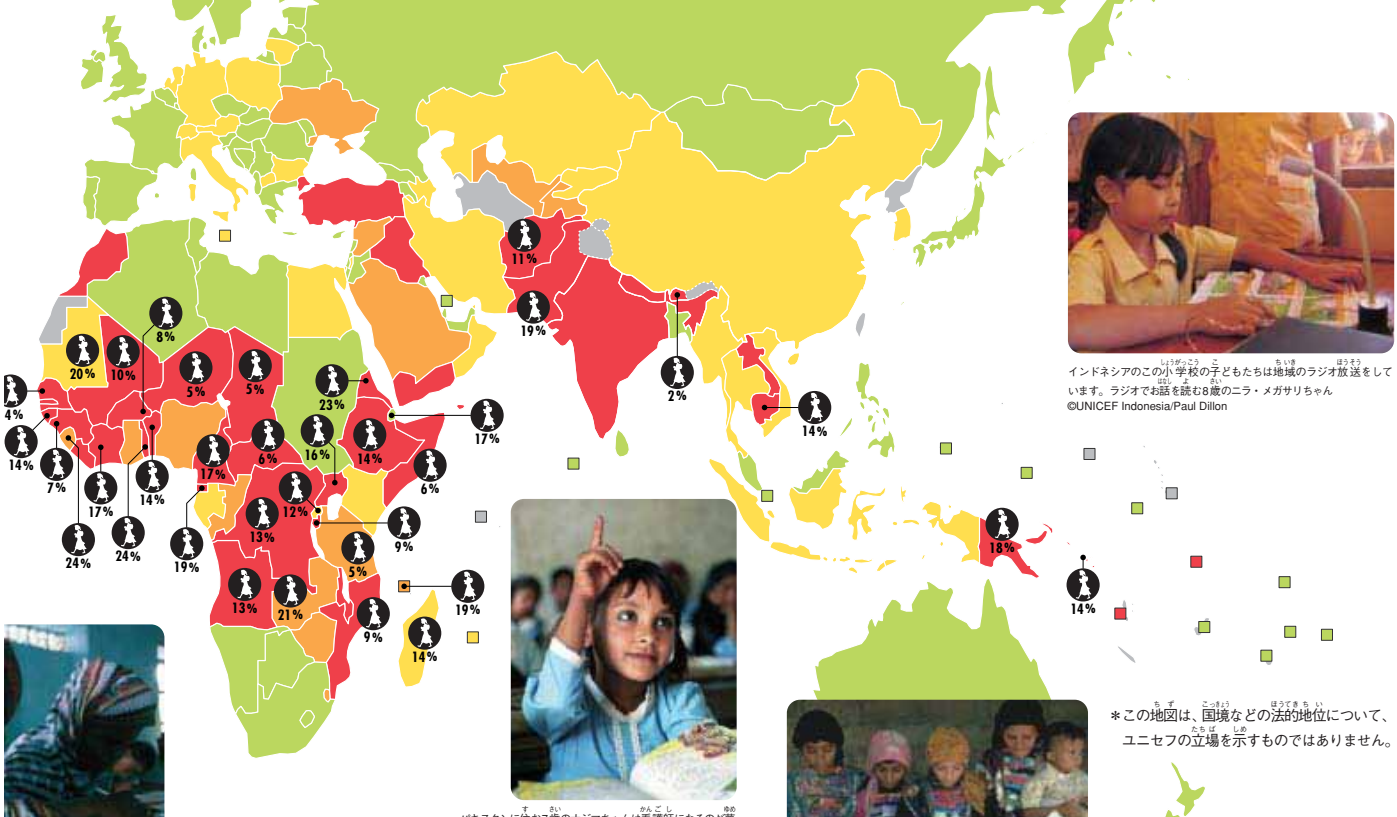
## コラム3 カラテ・ガールは自信満々

インドのビハール州に暮らすラリータは、インドではもっとも差別を受けることの多いカーストの出身です。「前は、やることといえば、草刈りとまき拾い、そうじや料理、それだけだったわ。でも、いまでは4カ所のセンターで40人の女の子に空手を教えているのよ」

ラリータは、学校に行くチャンスのない9～15歳の女の子と学校に通ったことのない女性のためにひらかれていた読み書き学校に通っていました。熱心に勉強するラリータは、ある日、ラリータのような女の子のために、合宿しながら行われる8カ月間の講座に参加しないかと誘われたのです。その講座では、小学校の勉強と生活に必要な知識が教えられ、場合によっては中学校に進むこともできるといいます。ラリータは、一も二もなく参加したいと答えました。でも、ラリータのお父さんは強く反対しました。ラリータは、そこでは衛生のことも学べるから、わたしたちを汚いとさげすむ人たちを見返すことができる、とお父さんを説得し、ようやく講座に出ることができるようになりました。

講座で、小学校5年生までの勉強と空手を学んだラリータは、今では、自信に満ちています。空手を教えにひとりでバスに乗って移動します。このあたりでは、女の人がひとりで、それもバスに乗って動きまわるのはめずらしいことなのです。バスの中でいやがらせを受けたときも、空手のおかげで大丈夫だったわ、と笑います。4人の兄たちは、今でもラリータが空手を教えることに反対していますが、今ではお父さんがラリータの味方をしてくれます。

「空手を習いはじめた女の子たちは、最初はこわいと言うの。でもだんだん慣れてきて、私みたいに強くなりたいと言うわ。そんなときはとてもうれしい」






インドネシアのこの小学校の子どもたちは地域のラジオ放送をしています。ラジオでお話を読む8歳のニラ・メガサリちゃん
©UNICEF Indonesia/Paul Dillon

©UNICEF/SOM02-030/Taylor



パキスタンに住む7歳のナジマちゃんは看護師になるのが夢
©UNICEF/HQ03-0288/Asad Zaidi

©UNICEF/HQ91-0241/Nicole Toutounji

＊この地図は、国境などの法的地位について、ユニセフの立場を示すものではありません。

アワティフたちが学校に通うことをよいとは思いませんでした。でもナイームさんが、「男だったら自分で何とかできることも、女はそうじゃない。うまく人生をおくるためには女の子に教育がひつようなんだ」と言うのを聞くと、だんだん子どもたちを学校に通わせるようになりました。それから8年。今では教室も3つに増え、教育を受けた子が村を豊かにしてくれると、みんなは考えています。

2001年、アワティフはエジプトの子どもの代表として、ウガンダでひらかれた子どもたちの国際会議に出席しました。「学校に通っていなかったら、こんなチャンスはぜったいになかったわ」と話すアワティフは、将来、先生になって自分が学んだことを他の子どもたちに伝えたい、と目をかがやかせています。

## コラム2 さよなら授業料！

ケニアの首都ナイロビ。貧しい人びとがくらすキベラ地区にあるアヤニー小学校の1年生の教室はおおさわぎです。35人用の教室に70人以上の子どもたちがひしめいています。シルビアは、その中でじっと先生の言うことを聞こうといっしょうけんめいです。

10歳のシルビアは、ついこの前まで学校には通っていませんでした。学校は授業料がかかり、その上、教科書代、制服代などの費用までかかるので、貧しいシルビアの家では、とうていそれをまかなうことはできなかったのです。

しかし、すてきなニュースがとびこんできました。2003年から小学校がすべて無料になるというのです。小学校には、これまで学校に通えなかった子どもたちがおしかけました。なんと、ケニア全体で130万人の子どもたちが新しく1年生になったのです。ケニア政府やユニセフは、急いで教材や学校の備品をそろえました。先生をふやすための研修もはじまりました。急にたくさんの子どもが学校にやってきたので、それを受け入れるために最初の1年は大変でしたが、これからはだいじょうぶ。4年生のセレスティナは「教材が買えなくて、そのせいで教室を追い出されるんじゃないかと心配だったの。でも、ユニセフが支援したノートやえんぴつを受け取って、本当にほっとした。自分の祈りが届いたんだ、と思ったわ」と話しました。

# オンライン インタビュー企画 第3弾

## メーリングリスト ユニセフ子どもネット ユニセフ・スタッフ

# 山口さんにインタビュー！

山口さん（左端）と一緒に働いているスタッフ
©UNICEF/Yamaguchi

みなさん、こんにちは！ネットワーカーの須藤沙織です。今回はヨーロッパ地域事務所の山口郁子さんが、メーリングリストで私たちからの質問に答えてくれました。インタビューでのようすを、私たちがみなさんにご報告します！

ユニセフといえば、まずフィールドでの仕事が思い浮かぶけれど、山口さんはジュネーブで広報官の仕事をしているんだって。ユニセフっていろいろな仕事があるんだね。好奇心いっぱいの田　のぞみです。

## 山口郁子さんからのメッセージ

Salut！（サリュー）みなさん、スイスのジュネーブからこんにちは！ユニセフというと、みなさん、アフリカやアジアの国々にで働く姿をまっ先にイメージされるのではないでしょうか？もちろんユニセフの仕事の中心はフィールド（実際に支援活動を行っている開発途上国の現場）での活動ですが、それらがスムーズに、そしてよりよく行われるために、ニューヨーク本部をはじめとして、ここジュネーブでも、たくさんのユニセフのスタッフが働いています。今回はみなさんにフィールド以外のユニセフの仕事をご紹介できればと思っています。

私が働くヨーロッパ地域事務所は、日本ユニセフ協会をはじめとする、世界37カ国にあるユニセフ国内委員会の窓口でもあります。各国の委員会はその国の中で、子どもたちの権利が守られるように活動しているほか、ユニセフのフィールドでの仕事を紹介したり、その活動を支えるという大切な役割を担っています。私たち広報官の仕事は、フィールドで何が起きているのか、ユニセフはそこで何をしているのかを把握し、世界中の国内委員会やマスメディアに発信し、世界の国々にの人と、フィールドで働くユニセフのスタッフ、そしてその国の子どもたちをつないでいくことです。

また、ジュネーブには、国連の本部機能がおかれており、国連機関、NGO（非政府組織）の本部も数多くおかれています。そのためジュネーブは、紛争や自然災害など、緊急の事態に対応する人道支援の中心地でもあります。イラクの戦争やイランの地震など、緊急事態が起きたとき、何が必要か、ユニセフに何ができるか、何をしているのかを発信していくのも私たちの大切な仕事です。

この仕事をしていて一番楽しいことは、いろいろな人と出会えること。みなさんと、メールを通じて出会えることを、とても楽しみにしています。

### PROFILE

東京都出身。国際基督教大学教育学部卒業。大学の時、開発と教育のテーマに出会い、卒業後、ロンドン大学教育学研究所大学院で学ぶ。

修士課程修了後、NGOで働いていた時に参加した、学校を建てるワークキャンプを通してカンボジアという国とその人びとに出会い、この国で働きたいと思うようになる。1996年から2年間、その夢がかない、国連ボランティアの識字専門家としてプノンペンのユネスコ（国連教育科学文化機関）事務所に勤め、農村地帯で村人に読み書きを教える学校外教育プログラムにかかわる。

カンボジア赴任中に結婚、妊娠したため、当時クーデターなどで治安が悪かった当地を離れ、1998年にパキスタンのイスラマバードに家族と赴任。イスラマバードでは日本大使館で、現地のNGOの活動を支援する、日本政府の草の根無償資金協力プログラムを担当するNGOアドバイザーとなる。

3年後、日本に戻ったものの、すぐにジュネーブに家族で移動。現在ユニセフ・ジュネーブ地域事務所のコミュニケーション・セクションで、主に緊急時の人道支援にかかわる広報渉外活動と、世界中のユニセフ国内委員会の窓口としての仕事を担当している。

#### ●プライベートの山口さんは？●

パキスタンで育った5歳の娘が一人います。趣味はペットの犬と森を歩くこと、映画を見ること、スキーをすること、ピアノを弾くこと、旅行をすることです。大学生の時から、アフリカ、東欧、中南米、アジア、と数え切れないほど回りました。今思うと、そのほとんどが途上国です。カンボジア、パキスタンと現場での活動が続いていたので、はじめはジュネーブでの生活や仕事にとまどいましたが、現地事務所で働くのとはまた違った、グローバルな視点で仕事ができることを楽しんでいます。両方の視点を学んで、遠くない将来、またフィールド（できたら暖かい国）に戻って、働くことが希望です。

## 山口さんのある一日

スイスのジュネーブとの時差は、マイナス8時間。みんなが家に帰る夕方頃、山口さんの一日が始まり、眠る頃にはあわただしく午後の仕事をこなしています。どんな一日を過ごしているのか見てみましょう。（中津川　有紀さんからの質問）

**◆メールを読む**

私の一日は、同僚にあいさつをしたあと、メールを読むことで始まります！今ほとんどの仕事が電子メールを使って行われていますよね。ユニセフも例外ではありません。特にユニセフは、世界中の国々に、それも必ずしも電気通信事情の良いわけではない国と連絡を取りあうので、電話やファックスがなかなか通じないこともあり、また時差もあるため、メールが大切な役目をしています。平均して20～30通、多いときはそれ以上のメールが、こちらの朝の時点で届いています。

**◆ニュースをチェックする**

日本のメディア（マスコミ）を中心に、その日のおおまかなニュースをインターネットでチェックし、ユニセフや国連にかかわってくるような何か大切な情報がないかを確認します。

**◆電　で状況報告**

ユニセフの駐日事務所や、ジュネーブにある日本政府代表部など、日本に関わる機関やオフィスとも連絡をとりあっているので、毎日ではありませんが、電話をして近況報告をしたりします。

**◆ランチタイム**

ふつうは1時間から1時間15分くらいのお休みがあり、夏やお天気のいい日は、目の前にある公園で散歩やランチをします。

**◆本部との仕事がスタート**

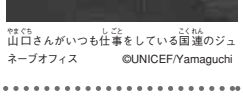
再び仕事ですが、ユニセフの本部があるニューヨークは時差の関係で、こちらの2時過ぎごろから動き出すので、ニューヨークとのやり取りはこのころから始まります。世界の何か所かを同時につなぐ、電話会議もあります。

**◆ミーティングに出席**

私の働いているセクションでは、週に一度は全体のミーティングがあります。全員で、その週の課題や必要な対応などを検討・確認します。また、なにか大きな会議やイベントなどが予定されている場合、それにかかわるスタッフが集まってミーティングをします。

**◆メディア対応**

週に2回、国連本部で国連に詰めているジャーナリストを対象にしたメディア・ブリーフィングがあります。ユニセフのスポークスマンがユニセフのニュースやメッセージを伝えたり、インタビューを受けたりするので、それについて行き、ジャーナリストと話したり日本のメディアのオフィスに顔を出したりして、情報を集めたり伝えたりします。

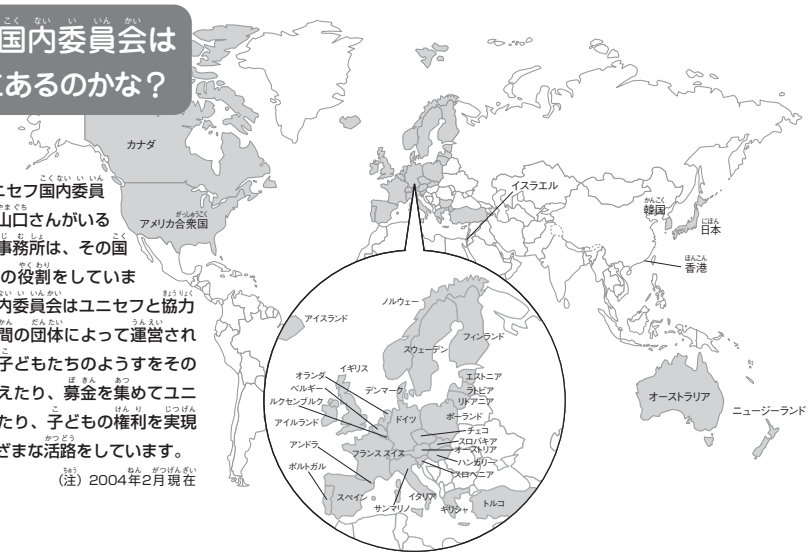


山口さんがいつも仕事をしている国連のジュネーブオフィス　©UNICEF/Yamaguchi

## ユニセフ国内委員会はどの国にあるのかな？

現在世界には37カ国(注)にユニセフ国内委員会があります。山口さんがいるヨーロッパ地域事務所は、その国内委員会の窓口の役割をしています。ユニセフ国内委員会はユニセフと協力協定を結んだ民間の団体によって運営されており、世界の子どもたちのようすをその国の人びとに伝えたり、募金を集めてユニセフ本部に届けたり、子どもの権利を実現するためにさまざまな活路をしています。

（注）2004年2月現在




### Q.ユニセフとその国内委員会の役割の違いは何ですか？（秦　聖一郎　18歳）

日本にあるユニセフ駐日事務所は、ユニセフ本体の東京にある事務所です。そして、日本ユニセフ協会は、日本におけるユニセフ国内委員会です。日本には国連のユニセフのプロジェクトはありませんので、ユニセフ駐日事務所の役割は、主に日本政府との協力関係を強化することなどです。もちろんユニセフのスタッフを本部やフィールドから招いて、シンポジウムなどを開き、政府、メディア、そして国民に、ユニセフの重要課題への取り組みを紹介したりする活動もおこないますが、国内でのアドボカシー(注)活動の中心は日本ユニセフ協会がになっているといえると思います。

（注）アドボカシー…政策提言。子どもたちの権利が守られるように、国民や政府に働きかけること

# 山口さんにこんな質問があったよ!!

ユニセフだけではなく、いろいろな場所で経験をつんできた山口さんに、たくさんの質問がありました！

「将来現地で働くにはどうしたらいいか」「世界の子どもたちのために何ができるのか」など、ヒントがいっぱいのインタビューでした。

**Q 私たち子どもは、同じ世界の子どもたちの情報を得ることがむずかしいことがあります。情報を手に入れたり、大切な情報かどうかをうまく見きわめるときに重要なことは何かありますか？　（田　のぞみ　16歳）**

**A** するどい質問にどっきりしました。大切な問題ですよね。みなさんへのメッセージの中で、ジュネーブは緊急人道支援の中心地と書きましたが、国連本部では毎日のように、国連専門機関、NGO、政府などが参加して、人道支援や国連のあつかうべきさまざまなテーマの会議を開いています。また、国連本部にはつねに約200人のジャーナリストがいて、国連に関するニュースをひろい、発信しています。私たち広報官だけでなく、こうした会議に出席するスタッフの一人ひとりが、子どもたちの代わりとなって、その声を確実に聞いてもらうように、がんばっています。

私たちが発信する情報は、主にフィールドのスタッフから得ています。子どもたちの情報はおとなの情報にくらべて手に入りにくかったり、問題が見えにくかったりすることがあります。ユニセフのスタッフのフィールドでの大切な役割の一つは、そうした声をひろい、まとめ、活動に反映させ、国内外に発信することです。ユニセフがその現場でどれだけよい活動をし、子どもたちに関する情報を持っているかが、ユニセフ全体の情報発信のカギになります。

ですから、その国の中で子どもたちにとって何が肝心かを最初に見きわめるのは、主に現場で活動しているスタッフです。そして、世界各地から送られてくるさまざまな情報の中で、どれを優先するか、また誰に発信すると効果があるかを検討するのが、私たちの仕事です。フィールドから送られてくる情報はどれも大切ですが、すべてを同時には発信できないし、それは効果的ではありません。ユニセフ全体としてのグローバルな視点で、私たちはそのニーズ、緊急性の高さ、ユニセフの取り組みの深さ、インパクトの大きさなどを見きわめて、適切な相手に発信します。

**Q 中高生時代はどのように過ごしていたのですか？　（中津川　有紀　17歳）**

**A** 私は東京にある私立の中高一貫教育の女子校に通っていたので、高校受験はありませんでしたから、6年間、特に中学一年から高校二年までは、ストレスもなくほんとうによく遊びました！

当時の夢は、具体的な職業としては思い描いていませんでした。進路について考えていたとき、「人生にとって大切なことは、どんなこと（仕事）をしているか、ではなくて、そのことを通じて何をしたいのか、何を伝えたいのか、何をかなえたいのかが重要だ」ということを聞き、とても共感し、私は何を伝えていきたいんだろう、と自分の核になる、信念のようなものについて毎日考えていたのを覚えています。世界を争いのない、よいところにしたいとか、学校や社会をもっと子どもたちが住みよい場所にしたいとか、自然環境保護にも興味があるし、といろいろなことに興味があったので、何を一番やりたいんだろう、そのためには何ができるんだろう、と考えると、行きづまってしまったのを覚えています。一方で進路は決めなくてはいけないし、大学も決めなくてはいけないし…と、現実には社会のしくみの中で決めていかなければならない「選択」に、とてもとまどい、また不満を持っていたのも事実です。私は17歳で、まだ本当の世界も知らないのに、どこの大学でなにをしたいか決めろなんて、むちゃな制度だな、と一人で怒っていたりもしました。ですから、○○になりたい、という具体的な夢はなかったのですが、自分の信じることを見つけて、それを信じて貫いていけるおとなになりたい、という想いはありました。それが夢だったのかもしれませんね。

ユニセフのオフィスがあるビルの屋上から見えるレマン湖の景色

©UNICEF/Yamaguchi

**Q ユニセフで働くには、何か特別な資格や経験が必要でしょうか？　（古川　彩香　16歳）**

**A** 一般に、どのポストでも大学院の修士課程以上の学歴が求められることが多いのですが、最近は働いた経験（職歴）も、とても重視されます。必ずしも国際開発関係の職歴である必要はなく、例えば、教育担当官なら、教師として働いた経験や、教育関係の仕事をした経験なども、その内容によっては評価されてプラスになることがあります。保健担当官はかつてお医者さんだった人などもいらっしゃいますが、そうでない人のほうが多いと思います。ポストによって必要とされる経験や学歴は異なりますが、最近はNGOの経験、途上国での活動経験も重視されていると思います。

**Q 派遣国や仕事内容は、自分で選べるのですか？それとも本部からの派遣なのですか？　（田　のぞみ　16歳）**

**A** 私は現在、日本政府がサポートするジュニアプロフェッショナルプログラムという制度を利用してユニセフで働いていますが、その制度では希望を出すことができます。ただ、必ずしも働く場所や機関を選べるわけではありません。しかし、通常2年の任期が終了した後、引き続きユニセフで働きたい場合、ユニセフで募集されるポスト（役職）に応募することができます。その場合は、自分の希望する職種や派遣国に自由に応募できますが、そのポストに見合った経歴や経験がないと、競争が激しいため、合格するのはむずかしいです。国連機関全体にいえることですが、近年、財政面でも厳しい状況にあり、従来の日本のような終身雇用制度で働けるポストは非常に数が限られています。ユニセフでも大部分の人が1年から5年ほどの期間つきの契約で働き、またその契約終了時に自分の希望のポストを探すという形をとっています。

**Q 今までしてきた活動の中で、一番印象に残っていることは何ですか？　（須藤　沙織　17歳）**

**A** カンボジアで仕事をしたいと思うきっかけになった、青少年ワークキャンプを引率したときのことです。

印象に残ったことはたくさんありますが、たとえば水。私たちが寝泊まりしていた場所には、水がめに張った水があるだけで、それを水浴び、そしてお手洗いを流すことに使います。夕方、みんな列になって順番に水を浴びますが、かめに張った水は、どのくらい使ったか一目瞭然。暑いのでどんどんつかうと、あっという間になくなってしまいます。水道の水だと自分がどのくらい使っているか、見えませんよね。それに、際限なく使えますよね。でもかめの水は、なくなってしまうと、それ以上すぐに汲みに行くことはできないので、あとの人が困ります。だから、最初のころ、日本からの参加者は私も含めて、かめをすぐ空にしてしまったのですが、だんだん考えて、みんなが使いきれるように、大事に水を使うようになりました。

それからみんなで小さな村に学校を建てているときのこと。最初のころ、日本の参加者は、カンボジアの参加者が、怠け者だと怒っていました。日本人にくらべて、動きもゆっくりだし、すぐ休むし、お昼休みが終わってもなかなか戻ってこないからです。でも、日本で働くのとおなじようなはやさで動いていた日本人は、2・3日ですぐにダウンして病気になってしまいました。照りつける強い日差しと40度近い猛暑のなかで、とても日本と同じはやさで働くことは無理だからです。みんな、暑い国には暑い国のやりかたと、ペースがあるんだ、ということを身をもって知りました。

**Q ジュネーブはフランス語圏内ですが、仕事での英語の使用頻度はどのくらいですか？　（奥村　久実子　15歳）**

**A** 国連公用語(注)は全部で6つ、そのうち国連の仕事をする上でもっとも頻度が高いのは英語だと思います。ただ、旧フランス植民地国では、オフィスでもフランス語を使っている、という国がほとんどです。もちろん、ほとんどのスタッフが英語を理解できることが基本です。フランス語ができないと、アフリカの国ぐになどでの仕事はむずかしいでしょう。でも、本部など他の事務所とのやりとりもあるので、英語ができることは前提条件です。

（注）国連公用語…常任理事国や国連に加盟している国ぐにの中で、特に頻度が高いと考えられて選ばれた6カ国語のこと（英語、フランス語、スペイン語、中国語、ロシア語、アラビア語）

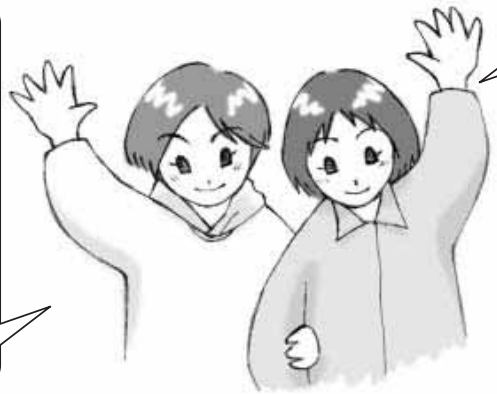
**Q 私たち子どもができることは何だと思いますか？　（田　のぞみ　16歳）**

**A** 自分も含めて、今わたしたちができることは、あきらめないこと、何かをしたい、何ができるだろうかという気持ちを持ち続けることだと思います。そして、次に、平和は一人では実現できないので、たくさんの人と話したり、時には議論したり、何ができるか考えたりしてみてください。子どもは子どものことが一番よくわかる素直で鋭い視点を持っていると思います。おとなたちが忘れがちな子どもの目で、ニュースや、情報をみつめてください。そして、どうしてなんだろう、なんでなんだろう、何ができるんだろう、とたくさん疑問を持ってください。子どもだけが持てる視点、好奇心、そして時間をフルに活用して、そしてその感想や、想いをおとなたちに教えてください。おとなはそこから学ぶことがたくさんあると思います。

ユニセフでは、フィールドからの情報を重要とし、情報を送るのにも、綿密な計画が立てられていることがわかりました。また現場での経験が豊富な山口さんの言葉を聞き、考えさせられることが多くありました。たとえ小さな力でも、子どもの視点から物事を鋭く見て、今できることをしていくことが大切だと思いました。私たちは、いろいろなものを吸収できる今こそ、さまざまな文化、考えと触れ合うことが大切だと思いました。

進路についての話も考えるところが多かったです。日本の教育では特に、早く進路を決め、大学を決め、曲がり道のない一直線の人生が求められているように思います。しかし、ゆっくりと自分の興味あることをしていき、その中で自然に道が開けてくるものだと山口さんはおっしゃいました。だから、今あせって、間違いのない進路を決めようとするのではなく、積極的に経験し、やりたいことを見つけていこうと思いました。大切なのは、世界のために何かしたい、そのために自分に何ができるかという問いを持ち続けていくことだと思いました。

（田邊　のぞみ　16歳）



家庭と仕事を両立しながら、自分の夢や信念を実現させているバイタリティーのある山口さんはすごいと思いました。ユニセフというと、フィールドでの仕事のイメージが強くあります。そのフィールドで得た情報を伝える大切な仕事があることを、初めて知りました。世界じゅうのどこかで今、民族紛争が起こっています、災害があります、貧困と飢え、そして病気で苦しんでいる人が大勢います。誰もが平和を望んでいるのに、時だけが過ぎていき、取り残されたり、逆行しているところもあります。でも、平和を望む人がいる限り、不可能ではないと思います。そして、それを手助けしている人がたくさんいることも、忘れてはいけないと思いました。山口さん、ありがとうございました！

（須藤　沙織　17歳）

# REPORT & INFORMATION 報告とお知らせ

お問い合わせ・もうしこみは
ユニセフ子どもネット事務
（日本ユニセフ協会 広報室内）
住所：〒108-8607
東京都港区高輪4-6-12
でんわ：03-5789-2016
ファックス：03-5789-2036
電子メール：jcuinfo@unicef.or.jp

## お知らせ Information

### 新着資料「世界子供白書2004」（日本語版）

4～5ページでくわしくお伝えした、『世界子供白書2004』の日本語版ができあがりました。今年のテーマは「女の子の教育」です。おとな向けの資料ですが、興味がある人はぜひ読んでみてください。一冊まで無料でお送りします。お申し込みは、ユニセフ子どもネット事務局まで。

### 新刊 絵本「すべての子どもたちのために」

「子どもの権利条約」のなかから大切な権利を選んで、すてきなイラストとともに、むずかしい条約の文章を、子どもたちにわかりやすいように作られた絵本です。全国の本屋で発売中です。

文：キャロライン・キャッスル／訳：池田香代子
発行：ほるぷ出版　定価：1365円（税込み価格）

## 報告 Report

### ユニセフ・ハンド・イン・ハンドが行われました！

©日本ユニセフ協会

2003年の12月から、全国2000カ所以上でユニセフ・ハンド・イン・ハンドが行われました。25回目をむかえた今回は「女の子も学校へ―すべての子どもに教育を―」を合言葉に、募金をよびかけました。12月23日の午後には、東京の恵比寿ガーデンプレイスでの中央大会のほか、銀座、新宿、渋谷などで街頭募金が行われました。中央大会では、日本ユニセフ協会大使のアグネス・チャンさんをはじめ、タレントの松村邦洋さんや石田純一さんほか多数の有名人のかたが応援にかけつけてくれました。全国各地域で参加してくれたみなさん、どうもありがとうございました。

### 今年高校を卒業するみなさんへ

2003年度は、ユニセフ子どもネットに423人（2004年2月現在）の子どもたちが参加してくれました。この3月をもって、40人がユニセフ子どもネットを卒業します。卒業生を代表して、秦君からのメッセージが届きました。

ぼくがユニセフ子どもネットに参加したのは高校1年の終わりでした。きっかけは、日本ユニセフ協会ホームページのユニセフ子どもネットのページでした。新聞やテレビの報道、本、ホームページなどに掲載されている子どもたちのようすを見ているうちに、日本に生まれたぼくらとあまりにも差があること知り疑問を持って、このままでいいのかなーって思っていました。子どもネットはぼくの考えと一致していたのですぐに参加しました。

入ってからは学習会に参加したり、インターネット上での話し合いなどをしたりと、たくさんのことを学び考えることができました。これらの活動はぼくを成長させてくれたと思います。

ぼくたちはほとんどの場合、なんの不自由もなく生活できとても幸せです。でもまだまだ苦しんでいる人がたくさんいることを忘れてはいけないと思います。一人ひとりが、平和や環境を真剣に考えれば、きっといい世界が実現できると思います。

ぼくはこれで卒業ですが、別の場面でがんばって行きたいと思います。これからのみなさんの活動にもすごく期待しています。がんばってくださいね。

これまで、本当にありがとうございました。

（秦　聖一郎　18歳）

秦くんが中心となって立ちあげたユニセフ子どもネット@九州のページ
http://unicef-cnk.hmc6.net/

2004年の春から、「ユニセフ子どもネット」は大きくかわります。紙で発行するユニセフ子どもネットニュースは、今回が最終号になります。これからは、電子メールとホームページでみなさんにいろいろなお知らせをしていく予定です。くわしくは同封した資料を読んで、更新の手続きをしてください。

## LETTERS ユニセフ子どもネットニュース NO.7を読んで

### ネットワーカーからの感想

前号ではアフリカ特集として、9月にひらかれた「ユニセフ・アフリカ・ミーティング」の報告や、アフリカの子どもたちのようすを伝える写真を紹介しました。

●モザンビークのエルマナちゃんの話にショックを受けました。モザンビークで取られた内臓が先進国の移植手術に使われているなんて…。
（坂　季里子　18歳）

●小学校の頃から、学校などでもよくアフリカなどの子どもたちの話を聞いていて、今思うと、私たちはそういった話に驚かなくなっているのではないかと思う。何にでも「慣れ」ってあるけれど、こういった本来なら聞き流すことなんてできないはずの話を、軽く受け流せるようになってしまうことは恐ろしいことだと思う。ニュースや文章では、現実味ってないけれど、それなら一体どうすればもっとたくさんの人の心に伝わるのだろう…。
（古川　彩香　16歳）

●いつも思うことですが、平和な時代のこの日本に生まれて、本当に幸せだと思います。将来みんなが幸せになれるようにする仕事に関われたらいいと思います。
（大木　茜　17歳）

●女性性器切除や、内臓を取って売買しているなど、私の知らなかったことを知ることができました。残酷すぎて、少し涙を流してしまいました…。ユニセフのネットワーカーである私でさえ、まだ知らない世界の過酷な状況がまだたくさんあると思います。アフリカミーティングの報告で、あらためてこの世界の過酷な状況を、もっとほかの人びとにも伝えていかなければならない！と思いました。
（国広　芽夢　15歳）

●イラク、イラン、パレスチナ…と中東地域も緊迫した状態ですが、アフリカも負けず劣らずという感じがします。以前アメリカが関与した、ソマリアもあまり良くない状況が続いていることを思うと、今のイラクもその二の舞になってしまうのでは、と考えてしまいました。
（けいこ　15歳）

★ネットワーカーからのお知らせ
藤原美典さんが学校の授業でホームページを作りました。ぜひ見てくださいね。
What We Can Do！ー 私たちにできること
http://contest2.thinkquest.jp/tqj2003/60004/

## Q&A 教えて！兼光さん！

©UNICEF/kanemitsu

前号でインタビューに答えてくださった、ユニセフ中東・北アフリカ地域事務所の兼光由美子さんから、その後みんなから届いた質問の返事が届きました。

**Q** 兼光さんの記事を読んで、もっと中東について知りたいと思いました。中東に関するニュースを見ていると、たくさんの民族の名前が出てきますが、中東にはどれくらいの民族がいるのですか？
（須藤　沙織　17歳）

**A** 国の数も多く、民族の数も多く、また民族の定義もいろいろなので、中東全体でどのくらいかという質問には答えることができません。たとえば私の住んでいるヨルダンでは、全体の人口は500万人で、そのうちの98％がアラブ人、残りの2％がサーカシアン人（黒海とカスピ海の間にあるコーカサス地方の人）とチェチェン人という構成です。隣の国シリアは、人口が1,700万人で、そのうちの90％がアラブ人、そのほか10％はクルド人、アルメニア人、サーカシアン人、トルコ人で構成されています。エジプトの人口は6,500万人ですが、そのうち大半の人が、古代ファラオ人の血を引き継いでいることを誇りに思っています。実際には、リビア、ペルシア、ギリシャ、ローマ、アラブ、トルコから侵略の歴史を繰り返してきているため、人びとの顔は様々です。ナポレオン時代にフランス人と混血し金髪の人もいるようです。

中東を旅行して、人びとの顔を見ているうちに東欧にいるのではないかと思えるような地域もあれば、ここはアフリカ？と錯覚するようなところもあります。

なぜ、このようにさまざまな人が中東に存在するのでしょう。ひとつには、その地理的な条件があると思います。中東は3つの大陸が接するところで、侵略と征服の歴史を繰り返してきました。また奴隷商の歴史もあります。さまざまな人がやってきて、混血していくうちに現在のようないろいろな顔のある中東になったのだと思います。そして、この地域は3つの宗教の聖地でもあります。過去には巡礼にきて、そのまま滞在する人も多かったようです。

**Q** なぜ中東やアフリカなどの暖かい地域に開発途上国が集中しているのでしょうか？
（馬場　友姫　14歳）

**A** 例外はありますが、全体の数で言うと南にある途上国の数の方が、北にある途上国の数より圧倒的に多いと思います。

なぜか？それは、19世紀に産業革命と列強主義がヨーロッパに起こったことと関係していると思います。この時代、ヨーロッパの国々には、資源のある国から資源を奪い取り、それを本国で製品にし、その製品を別の国で高く売ったり、奴隷をプランテーションに送って働かせたりする三角貿易を行っていました。ヨーロッパの列強にとって、資源の豊かな国々にを支配することは大きな利益をもたらしました。資源の豊かさ（農作物など）は気候に関係している場合も多く、列強の植民地への関心が南の暖かく資源の豊かな国々にに集中した、と考えれば、開発途上国が南に集中している理由になるのではないでしょうか。

植民地時代に築かれた構造は現在も続いており、例えば、アフリカのガーナはカカオの原産国で有名ですが、ガーナ産のチョコレートはあまり見かけません。チョコレートはカカオの木のないスイスやベルギーが有名です。なぜでしょうか。これはガーナはカカオをEU（ヨーロッパ連合）の国々にに輸出することはできますが、カカオからチョコレートを製造してEUに輸出した場合には、高い関税が課されるからです。このような例は、ガーナのチョコレートに限らずたくさんあります。また、ヨーロッパに限らず、日本に輸入されてくるものにも同じような例はたくさんあると思います。

このように、南の国が気候に恵まれ資源が豊かでも、産業が発展しにくい構造的な理由があります。そして、この構造を変えてゆかなければならないと思います。